平成３０年度～名張ゆめづくり協働塾～人材発掘研修　講演議事録

日時：平成３１年１月１２日（土）
９：３０～１２：００
場所：名張市防災センター

将来を見据えると地域づくりの進化は不可欠！

～新しい担い手発掘のコツ～

講師：都岐沙羅パートナーズセンター　理事・事務局長
斉藤　主税　氏

名張市の皆さんは、他所の地域がお手本にするような取組をされていると思っております。皆さんが先端を走っていろいろ地域で取組まれる中で、これからの時代はこれをやっていれば大丈夫ということはないわけです。

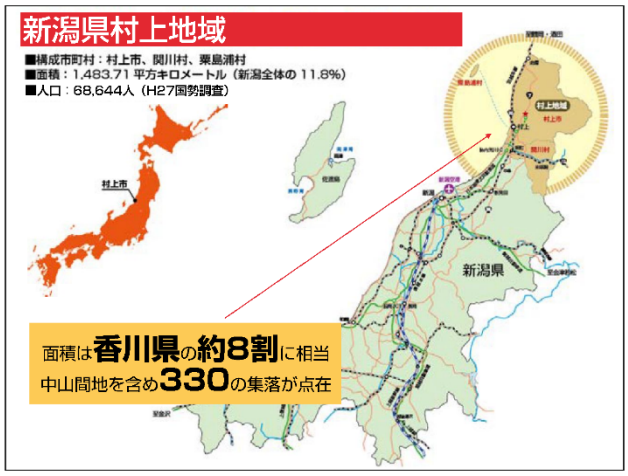
これから自己紹介も兼ねて、私の活動している地域の紹介をします。私は新潟県の村上地域というところで活動しています。そこでも、人口減少・少子高齢化が進んでいます。人口減少・少子高齢化は、田舎の話だと受け止められがちですが、村上地域は皆さんの云十年先まで少子高齢化が進んでしまっています。そういう地域でどういうことが起きているかをお伝えして、皆さんに将来に備えていただくのが大事だと思っています。

地域づくり活動は継続しなければなりませんが、ずっと同じ人がやっていくわけにはいきません。同じ人は続けられないので、必ず入れ替わりがあります。しかし、新たな人に活動してもらうのはなかなか難しくて、次の担い手を発掘育成するということは、どこの地域でも試行錯誤しています。今日はぜひそのヒントになるような話を伝えたいと思っています。

私は、都岐沙羅パートナーズセンターというＮＰＯに軸足を置いて活動しています。生まれも育ちも新潟ですが、大学を卒業して東京に一度出て、都市計画のコンサルタントをしていました。そのときに住民参加型の都市計画にも携わっていました。しかし、コンサルタントというのは所詮「金の切れ目が縁の切れ目」です。ずっと関わっていきたいと思っても、お金が切れると会社からは「待て」がかかります。私は、まちづくりのプレーヤーになりたかったということもありまして、いろいろな地域の活動をお手伝い、応援するところとして都岐沙羅パートナーズセンターを平成１１年に立ち上げて、そのまま今に至るという感じです。

今は、いろいろなＮＰＯに関わっていますが、主に地域づくりのコーディネートを生業にしております。いろいろなご縁で、地方の現場で活動していることもありまして、総務省が主催している地域運営組織・住民組織に関わる研究会の席に加えさせてもらっています。また、厚生労働省が地域包括ケアを推進していますが、名張市ほどうまくいっているところは全国的にありません。そういうことをうまく推進させていくためにはどうしたらいいか、ということも厚生労働省を始め、あちこちで話しをさせてもらっています。

私が普段活動している村上地域を紹介します。村上地域は、新潟県の最北端に位置しており、山形県に隣接しています。村上市、関川村、粟島浦村という１市２村で活動しています。面積は香川県の約８割ほどありまして、そこに３３０の集落が点在しています。人口は６８，０００人ほどです。ちなみに、新潟県は細長い県で、県境の山形側から富山側まで、直線距離で２５０ｋｍあります。それがどれくらいかというと、東京－名古屋間、九州でいうと福岡から鹿児島までの距離とほぼ同じです。



２０１５（平成２７）年の国勢調査を参考にして、村上地域を名張市と比べると、面積は約１１倍で、そこに名張市より若干少ない０．８７倍の人が住んでいます。しかし、高齢化率は１．２７倍です。これは、全国平均の２５年先をいっている状況です。２５年後の日本の姿が今の私たちの地域の状況です。

街中は城下町の風景が残っていて、町屋再生の取組は全国的に高い評価をいただいています。一方で、郊外に行くと山里の暮らしが今も営まれています。海岸部は漁港の暮らしで、北前線寄港地があるので立派な街並みもあります。粟島浦村という離島もあり、そこは人口３７０人でひとつの村です。そういう島の暮らしもあります。色々な特色が混在している地域です。

都岐沙羅パートナーズセンターは、いわゆる中間支援組織で、地域を元気にしようとする人たちを応援するＮＰＯです。中間支援組織は行政が設置して、民間が運営するパターンがほとんどですが、私たちは行政からの補助はゼロの状態でやっています。では、どうやって運営しているかというと、行政に事業を提案して、事業化されている、という形です。昨年の決算は２，３００万円くらいで、常勤職員が３名います。地域の活動のお手伝いをしたり、自分たちが事業の実施主体になって地域の方といっしょに活動したりしています。具体的

には、コミュニティビジネス、地域の色々な資源を活用した仕事興しを設立当初からずっとやっています。成果も出てきて、最近はいろいろなところから表彰もいただいています。平成２６年度には「ふるさとづくり大賞」として総務大臣表彰を受けました。何が嬉しかったかというと、プロの方に紹介動画をつくってもらったことです。普段どういうことをしているのか、話だけではピンと来ないと思うので今からその動画をご覧いただきます。

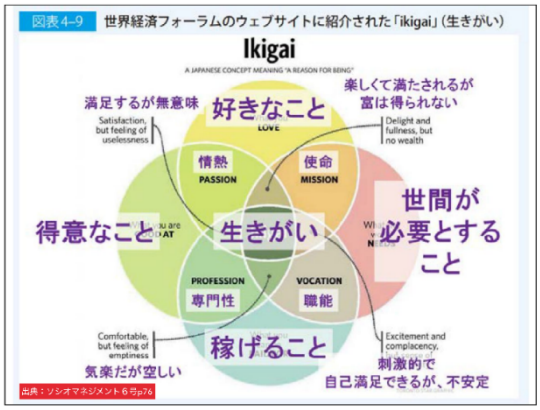
（注）動画については、都岐沙羅パートナーズセンターのホームページ（下記アドレス）からご覧いただけます。（ページ下部に動画へのリンクがあります。）

https://www.tsukisara.org/about-us/

動画の最初の方で紹介されていたコミュニティビジネスの形、プランを公募して助成金を出すという起業支援については、今でこそ普通にやられていますが、私たちは先駆けで、しかも地方で始めたということに注目が集まりました。

動画の中に出ていた縄製品を作っている「はつめの会」ですが、率直に「そんなもの売れるの？」と思われたと思います。どこが最初に飛びついたかというと、東京の高級クラフトショップです。クラフトをしている方が、本物の素材を求めているところにうまくつながりました。縄は樹種や草木の種類によって、採取の時期も下処理の仕方もバラバラです。この知恵や技術がどこに残っているかというと、高齢者の頭の中にしか残っていません。今は、ホームセンターに行けば道具も簡単に買えますが、昔は道具も自作していたわけです。そういう知恵も高齢者にしか残っていません。そういったことを生かして商品開発をしています。今では、縄は海外のアパレルメーカーにも取引されており、ＢＲＵＴＵＳ（ブルータス）という男性向けのファッション雑誌に掲載されたダッフルコートにも使われました。１着１２６万円で世界限定５０着販売だったそうです。誰が買うのか思わず聞いてしまいましたが、世界の超富豪層、華僑などそういう方にお買い求めいただいて完売したそうです。縄の何が評価されたかというと、結び目の美しさだったそうです。まさに技術が宝物に代わるということです。このように、なかなか日の目を見ない地域の知恵や技を丁寧に掘り起こして、それをビジネス、自らお金を稼ぐ仕組みにして、取組を継続してもらおう、ということをしてきました。

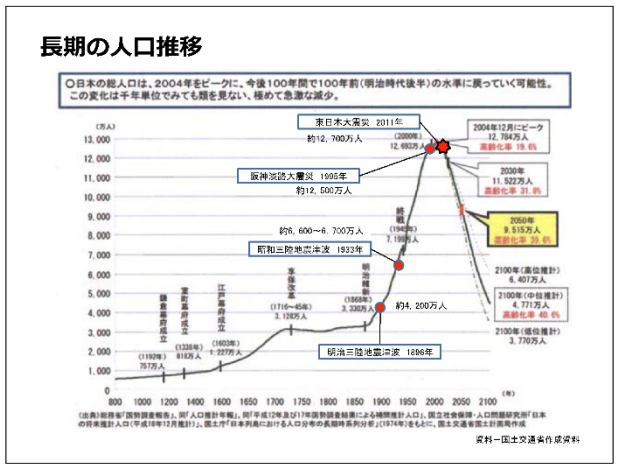
最近、こういうことが評価されているのでご紹介します。世界の各国の指導者、総理大臣や大統領、超一流企業のトップ、学者などが招待制で集まって会合する世界経済フォーラム（通称「ダボス会議」）の中で、海外の人が日本には「Ｉｋｉｇａｉ（生きがい）」という考え方があるということを世界に向けて発信していました。「生きがい」とは、「好きなこと」、「得意なこと」、「世間が必要とすること」そして「稼げる」こと、この４つの要素が交わる部分であるという考え方です。「稼げること」というのは結構大事な要素です。これから特にこういう取組が必要になると実感しています。

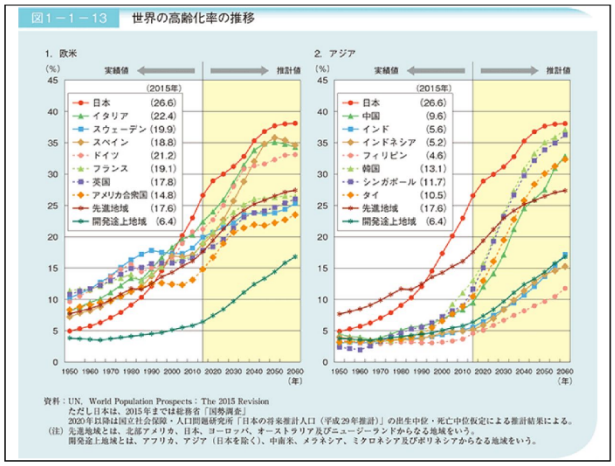


私はこういう取組をずっと地域の中でやってきました。それで着実に地域は元気になっていきました。しかし、先ほど地域の人口は６８，０００人とご紹介しましたが、活動を始めた１５年前は８３，０００人で、１年に１，０００人のペースで減少し続けています。高齢化率は年１％のペースで上がり続けて、１４％上昇しました。年少人口（０～１５歳未満）は半減しています。この状況を見ていると、とにかくこれまでとこれからは違う、同じことを続けていたら地域が立ち行かなくなるということで、人口減少・少子高齢化への取組を加速化させてきたわけです。

これまでとこれからは違うということで前提事項をご紹介させていただきます。

右に載せているのは、国土交通省が作っている人口の推移です。鎌倉時代から載っています。日本の人口は江戸時代に入るくらいで１，０００万人を超えました。江戸中期までは緩やかに伸びて、その後は３，０００万人で安定推移して、明治に入って爆発的に増えました。今は既にピークを迎えて、今後は急激に減少していくだろう、という予測が出ています。明治に入って１５０年かけて急に増加してきたものが、それと同じ割合で減っていくという予測です。これは残念ながらあまり外れません。なぜかというと、人口の推計というのは単純な話で、どのくらいの人が生まれて、どのくらいの人が亡くなるかという２つの要素で推計が成り立つからです。このまま何もしなければという前提ですが、人口は急激に下がっていくだろうと言われています。



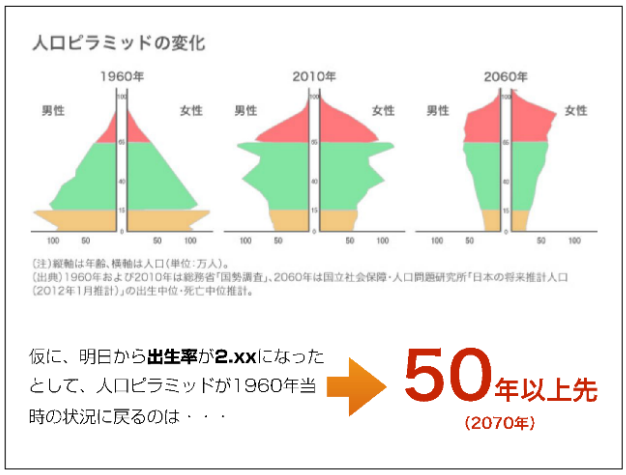


実はこの状態は、日本が世界の最先端を走っています。左には、国連がつくった世界の高齢化率の推移を示しています。左側は先進諸国の高齢化率の推移と今後の予測値です。２００５（平成１７）年の時点で、日本は先進諸国の中で高齢化率トップに躍り出ています。この状況は、残念ながら抜かれることなく今後もトップを走るでしょう。アジアの中では、１９９５（平成７）年にトップになり、その後はずっと１位を独走しています。

これが何を意味しているかというと、どの国も経験したことのない、どの国でも前例のない状態に日本は突入しているということです。だから、前例がないという言い訳はできませ

ん。ほかの国も、この状況を興味津々で注意深く見守っています。いずれは、どの国も同じ運命をたどっていくからです。私たちは、世界の最先端を走っている状況に置かれているということを認識してほしいと思います。

そういう状況にあって、国は、まずは子どもを増やしましょうという取組をしています。これは、非常に大事な話ですが少し注意が必要です。なぜかというと、この取組に即効性はないからです。



左のグラフは、そもそもなぜ人口ピラミッドと言うのかご存知ですか。１９６０(昭和３５)年の高度経済成長期にはまさにピラミッド型でした。しかし、２０１０（平成２２）年はつぼ型と言われています。そして、このまま何もしなければ２０５０年にはローソク型もしくは鉛筆型になるだろうと言われています。

実は、社会の仕組みや色々な制度はピラミッド型の人口構成に合わせて作られています。それが今ではつぼ型になっているので、いろいろな歪み、弊害が出てきているというのが実態です。仕組みを人口構造に合わせて変えていくということもあるのですが、人口構造をピラミッド型に戻すということも積極的に行われています。しかし仮に、明日から出生率が回復したとしても、１９６０年のような形に戻るまでには理論上は５０年以上かかります。出生率を適正な数値に戻そうと思ったら、これから５０年間、出産適齢期の方が４人の子どもを産み続けないと戻らないということです。不都合な真実なのであまり言われませんが、そういう状況だということです。

取組を続けることは大事ですが、成果が出るまで時間がかかります。その間に地域はどうしますか。それが私たちが直面している課題です。人口減少への取組はあきらめてはいけないし、人を増やす努力はしないといけません。しかし、人口減少はどうしても避けられないということを一旦受け入れましょう。

他所から人を増やすと言っても、日本全体の人口が減っていくわけです。奪い合いをして、それに勝つという方法も確かにありますが、人が減ることよりも、私たちの暮らしに大きく影響してくるのは、人口構成、年齢構成の変化です。６５歳以上の方の割合が何%になったという話がよく聞かれますが、皆さんお元気です。高齢化率が高くなったからどうということではなく、細かく年代区分の意味、地域における世代の意味を考える必要があります。

６５～７４歳というと、高齢者の区分になってしまいますが、今はこの方々が一番多くて、この方々によって地域が支えられています。今、高齢化率が上がっても地域がさほど困っていないのは、この方たちが地域を支えていただいているから、人数が多いからというのが理由です。

ただ、７５歳以上になると支えられる側になる人の割合が増えます。８５歳以上の方たちは、既に４人に１人が要介護３以上です。お年を召されていくと支えられる側になるのは間違いありません。こういう前提を頭の隅に置いておきながら、名張市の人口推移を見ていただきたいと思います。

右の表は、名張市における１９９５（平成７）年から２０１５（平成２７）年までの国勢調査のデータと、それ以降は社人研（国立社会保障・人口問題研究所）による人口推計データです。ここ２０年間で見ると、１０年前に人口のピークを迎えてその後は微減しており、このままいくと減り続けるという予測がされています。子どもたちの数は、２０年で３割以上減っています。少し緩やかになったとしても、ほぼ同じペースで減り続けます。生産年齢人口は、２０年間で１５％減っていて、今後は加速して減っていくという予測です。

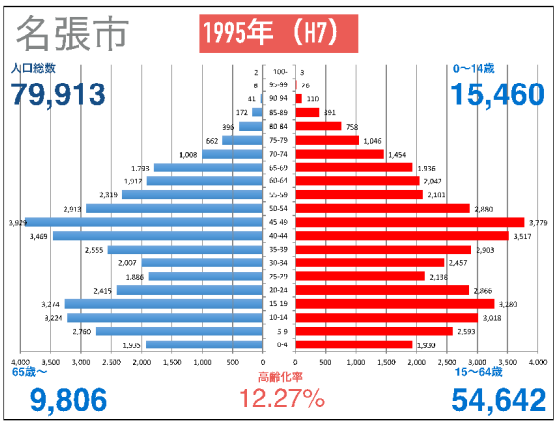
	各年の国勢調査データ			社人研予測	
名張市	1995年	2005年	2015年	2025年	2035年
人口（人）	79,913	82,156	78,795	73,582	65,699
		20年間で1.4%減少		今後さらに16.6%減少	
0～14歳	15,460	11,603	10,060	8,728	7,032
		20年間で34.9%減少		今後さらに30.1%減少	
15～64歳(A)（生産人口）	54,642	55,593	46,462	39,020	34,128
		20年間で15.0%減少		今後さらに26.5%減少	
65歳～（高齢者率）	9,806	14,893	22,273	25,834	24,539
	21.89%	28.92%	35.50%	40.25%	42.44%
		20年間で3.60倍		20年間で1.10倍	
65～74歳	6,191	8,315	12,699	11,072	8,500
75歳～	3,615	6,578	9,574	14,762	16,039
85歳～(B)	753	1,555	2,860	4,251	6,874
※85歳以上の４人１人が要介護３以上／要介護３以上の2人に１人が85歳以上（国勢調査より）					
A÷B	72.6人	35.8人	16.2人	9.2人	5.0人

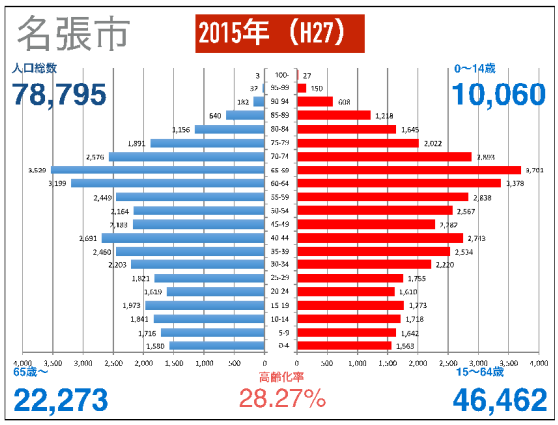
※2015年の高齢者率　三重県平均：27.92%　全国平均：26.63%

６５歳以上の人口はこの２０年間で、３．６倍になっています。今後どうなるかというと、若干増えて１割増しくらいになる予測です。高齢者の数は、今とほぼ同じ人数で向こう２０年間は推移しますが、子どもたち、若者世代は減るということです。これからは、高齢者の人数は変わりませんが、働く世代と子どもの数が減っていくため、高齢化率が高くなります。

６５～７５歳の方々の人数は今がピークで、今後は減っていきます。あと１０年経つと急激に減っていきます。そうなると、これから役員の成り手は足りません。今の仕組みではもって１０年です。人手が足りなくなる状況を踏まえて、これからの地域づくりを考えていかないといけないのです。

次に載せているグラフは、名張市の人口ピラミッドです。１９９５年には１０代の子どもと４０代後半の現役世代の部分に山が２つありました。これが２０年間でどう変化したかというと、完全に山が消えて、つぼ型の人口構成になっています。当然、行政も今後の人口ビジョンを公表していますが、これを説明してもピンと来る人も来ない人もいると思います。なぜかというと地区によって全然状況が違うからです。



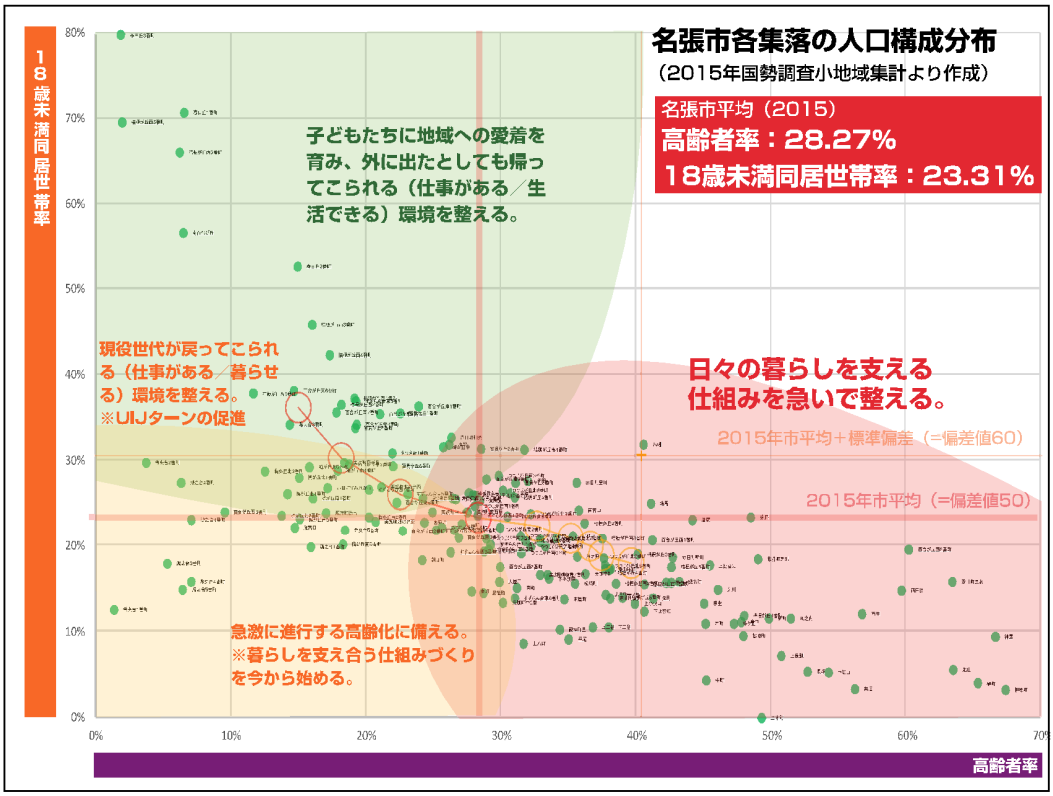


下の分布図は、横軸が高齢化率で、縦軸が１８歳未満同居世帯率、つまり高校生以下が一緒に住んでいる世帯の割合です。一つ一つの点は番町・町単位を表しています。折れ線グラフは名張市の中心値です。

このグラフ上で置かれている位置によって取り組むことが変わります。高齢化率が高くて、同居率が低く、子どもたちも少なくなっている地域では、日々の暮らしを支えていく仕組みを急いで作っていく必要がありますが、こういう地域ばかりではありません。

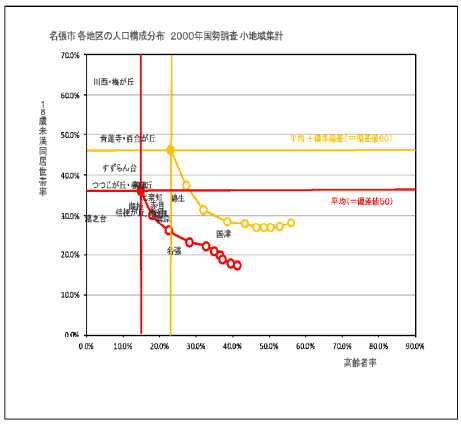
緑（左上）のゾーンに位置している、子どもがたくさんいる地域では、地域への愛着を育み、外に出たとしても帰ってこられる（仕事がある／生活ができる）環境をつくる必要があります。

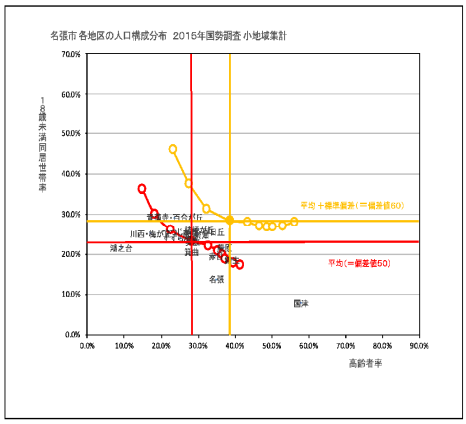
黄色（左下）のゾーンは、高齢化率はまだ高くなくても１８歳未満同居世帯率が低いという地域は、子どもも少ないということで、子どもが巣立ったあとの世帯が多いという状況です。そうすると、何もしなければ急激に赤（右下）のゾーンに入る可能性があります。Ｕ、Ｉ、Ｊターンでいろいろな方に入ってきてもらう取組をすると、上の緑のゾーンに行く可能性も残されていますが、どちらを選ぶかは地域次第です。

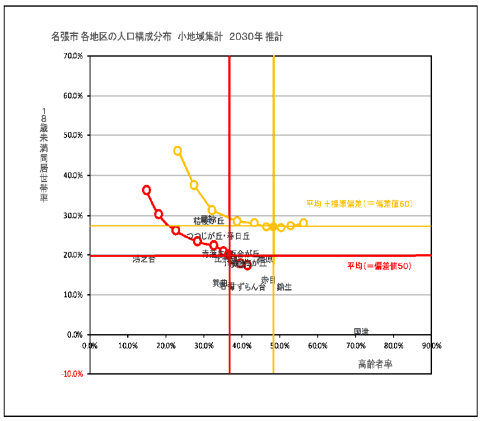


この分布図を見ると、立地は関係なく、街中でも高齢化率が進んでいる地域もあります。小さな単位で見ていくと個々の状況がかなり違います。当然、子どもたちがたくさんいるところと高齢化率が高いところでは、地域に合わせたそれぞれの取組が必要です。

下のグラフは、地域づくり組織単位で、２０００年と２０１５年時点の高齢化率や１８歳未満同居世帯率の変化を表しています。全体的に右下に下がっているのが分かります。高齢化が進んで子どもたちが少なくなっています。計算上ですが、今後どうなっていくか、このペースでいくことを前提にすると、一番右のようになります。



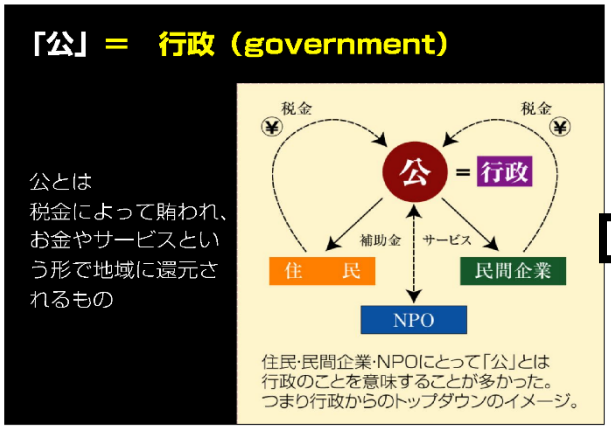


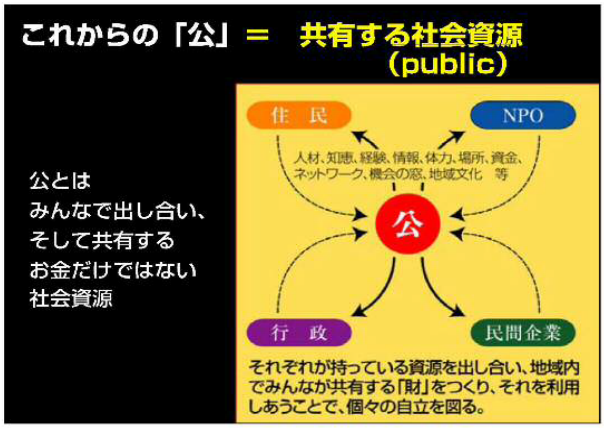


こういう状況に置かれている中で、もう一つストレートにお伝えしますが、市民は行政サービスの消費者であり続けていいのかということがあります。人口減少と少子高齢化が進むとどうなるのか、税収が減ってきます。高齢者が増えると、社会保障費などの支出が非常に増えるのは間違いありません。そしてもう一つ、実はどの自治体も隠れた借金があります。それはインフラ、道路、橋梁、トンネルなどの更新にかかる費用です。トンネルの崩落事故のニュースは聞かれた方も多いと思います。このように、日本の社会の支出は増えていく一方で、今までどおり役場に言ったら何とかしてくれると考えられますか。地方、田舎に行けば行くほど行政依存がすごく強いです。実は、田舎の方がインフラの補修費が結構かかります。ほとんど人が使っていないトンネルや橋梁、道路にも更新費用が大きくかかります。まずは、行政への依存体質を改善することが必要です。もちろん行政が仕事をやらないわけではありません。ただ、行政の仕事は増えていく一方で、人が減っています。働き方改革と言われていますが、傍から見ていると、真っ先に役場の内部が改革しないといけないと思います。行政依存体質で言っておけば何とかなる時代から、何とかならないということが往々に起こってきます。自分たちで何とかするしかないわけです。この仕組みを作るか作らないかで地域は変わってきます。

そうすると、今は「公」＝行政と言う考え方で、住民や企業が税金を納めて公共サービスを受けるという形になっていますが、元々の「公」の漢字の意味は、取り囲んでいるものを解き放つという意味です。公＝共有する社会資源、すなわちそれぞれが持っている社会資源を真ん中に積んでみんなで使い合う、真ん中の共有財産こそがそれが公ではないかと考えています。行政もその一員として、皆さんといっしょに、ＮＰＯも民間も協力し合ってやっていく方法しかないかと思います。そのために、これまでの延長線上ではなく、時代に合わ

せた進化が必要です。





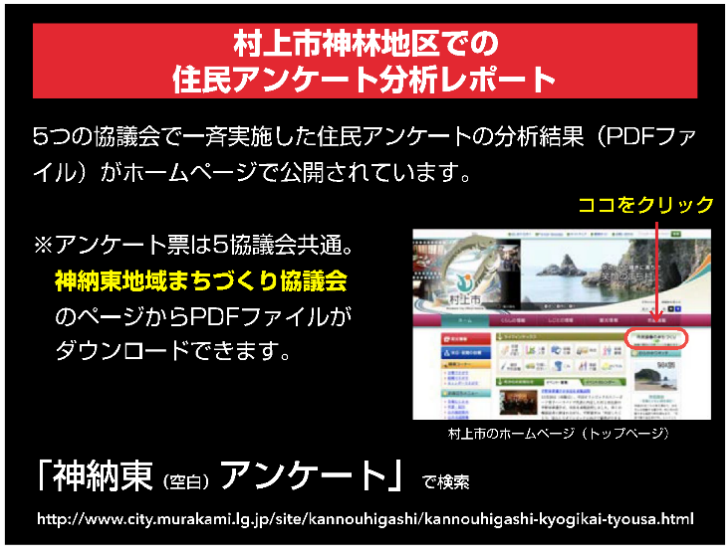
こういう状況の中で求められることが３つあります。１つ目は、活動ではなく事業、自らお金を回す仕組みを考えるということです。２つ目は、経済を含めた住民自治を作るということです。名張市では交付金をかなり手厚く出してもらっていますが、交付金だけではなく、自らが稼ぎ出してやっていくという考え方が必要で、そのためにヒントになるのが３つ目の分野横断による複数機能です。縦割りでは人口減少のこれからの時代は回らなくなります。言い方は悪いですが、いかにしてついでにやるか、まとめてやるかがこれからどんどん求められるようになります。分野横断による複数機能、それを総称して小規模多機能自治と言います。名張市はその推進役の一役でもあるわけです。

もっと具体的に、人口減少と少子高齢化が暮らしにどんな影響がでてくるのかということについては、実感していることもあるかもしれません。何が問題かというと、誰が手を出したらいいのか分からないこと、今まで個人で賄ってきたものが個人で賄いきれなくなることが出てくることが問題です。例えば買い物であれば、体が動かない、運転ができない、近くの店がなくなったなど、買い物という行為がままならなくなってきます。他にも、お墓の管理、空き家、耕作放棄地、これらは全部個人の営みの中で完結していたものです。今後は個人では賄いきれなくなる、この変化にどう対応していくかが問題です。これらは、そもそも行政が対応する範疇かというのも微妙なラインです。そういうことが増えてきます。まずこれから考えないといけないのは、冷静に現状を見据えて将来の備えを今から始めるということです。高齢化の話をたくさんしましたが、高齢者を悪者にしているわけではなく、社会保障費の増大を阻止することが必要です。いつまでもお元気でいていただければいいのです。

葉っぱビジネスで有名な徳島県上勝町は、介護保険適用者が驚くほど少ないということは意外と知られていません。なぜかというと、稼ぐのに忙しくて老いる暇がないからです。お金の張合いや活躍の場は、これからますます重要になってきます。新潟県内のある自治体で民間が試算した結果によると、４０人の集落で、介護保険適用の平均年齢を５年遅らせた

場合、行政は年間７億円の節約になります。これらのことから分かるとおり、お年寄りにお元気でいていただくことが非常に大事だということです。

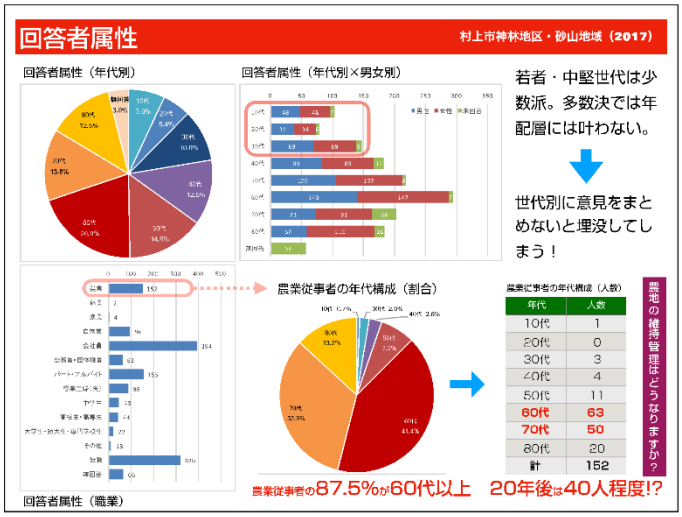
若者世代は、人口構造が変わるとどんどん少数派になります。最近は若者の声が聞こえないとよく言われますが、人数が少ないからそれはある意味当たり前のことです。それが現実に起こり始めています。そうすると、若者世代に丁寧に意向を聞くことをしないと、数では年配の方が多いので、残念ながら若い世代の意見が埋没してしまいます。こういう状況があるからこそ、地域ニーズを確認しようとするときには、中学生以上対象の全住民アンケートをしましょうということをお伝えしています。通常の住民アンケートは世帯向けにとりますが、これは、どなたが答えていますか。通常は世帯主の方ではないですか。世帯主は高齢の男性であることが多いです。つまり、アンケート結果は高齢の男性の意向でしかないとも言えます。残念ながらこれでは、女性や若者の声が反映されているとは言い難いです。これからの時代は、きちんとそういった方の声を集めようということで、中学生以上の全住民にアンケートをとるということをやっています。私も、地元のあちこちに声をかけて、昨年は８地区、今年は２地区で集計中です。地域を挙げて回収してもらい、回収率は８割近くあります。なぜこんなに回収率が高いのかとよく聞かれます。それは基本的に、手配り、手回収してもらっているからです。自治会、役員を総動員しました。それができないというのであれば、できるようになってからアンケートをしましょうと言っています。単にアンケートを実施するのではなく、自分たちの地域に必要だと実感してからアンケートを実施してもらっています。だからこれだけ高い回収率になっています。新潟県内の各地で同じように地域支援をしている方とも手を組んで、アンケートをやりましょうと声をかけて実施しています。今年もさらに実施している地域が増えています。全国各地でもやられています。



アンケート票や分析結果を詳しく知りたい方は、資料に載っています。また、村上市のホームページにも出ていますし、もしくは検索エンジンに「神納東　アンケート」と入れてもらうとトップでヒットしますので、興味のある方はご覧ください。アンケート票と分析結果がダウンロードできるようになっています。

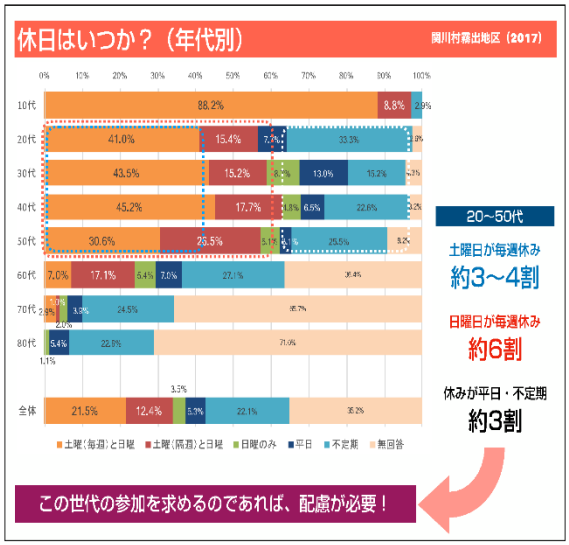
（http://www.city.murakami.ig.jp/site/kannouhigashi-kyougikai-tyousa.html）

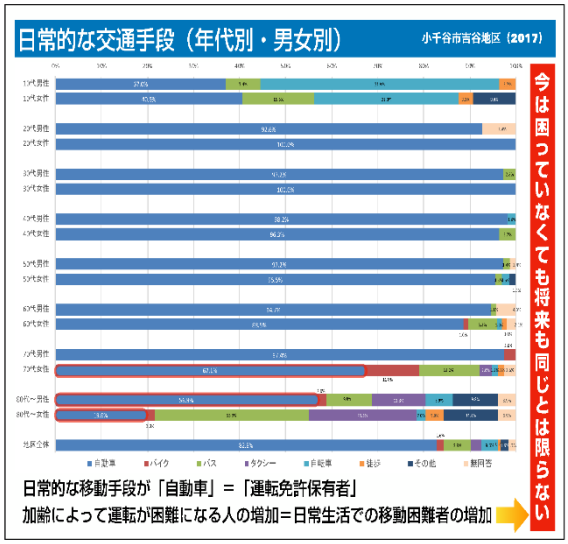
アンケートで何が見えてくるかを少しご紹介します。例えば、年齢・性別を聞きますが、横棒グラフにすると一目瞭然で、３０代は圧倒的に少数派です。この世代の声を丁寧に聞かないといけません。仕事は、１５２人が農業と言っており、この地域の基幹産業ですが、そのうちの８７．５％が６５歳以上です。２０年後には農業従事者は４０人くらいになります。そうなると、このままで農地の維持管理は大丈夫か、ということが見えてきます。



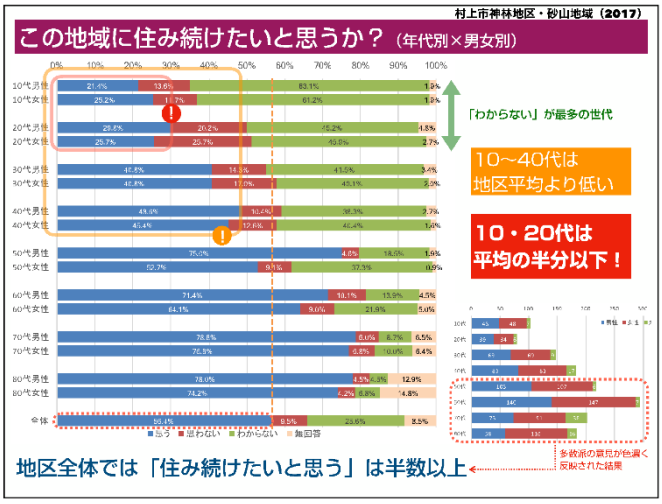
また、現在は週休２日が定着しているように見えますが、実は地域によって違います。例えば工場がある地域だと、夜勤や３交代制で勤務している方が多く、必ずしも土日が休みとは限りません。そういうことを考えると、休みの日に行事や共同作業をやろうと思っても、若い世代が集まらないということが起こります。そもそも休みでない可能性があるからです。この地域では、毎週土曜日が休みの人は全体の半分以下でした。日曜日まで広げると、６割くらいの方が休みでした。つまり、土曜日に行事をやっても人が集まらないということを意味しています。また、土曜日が休みだという方が２割という地域もあります。当然、その世代の参加を求めるのであれば、曜日の配慮も必要だということが言えます。

日常的な交通手段について、田舎は車依存が激しいです。どこに行くにも車です。だから、運転ができなくなると、生活がものすごく困るわけです。７０代以上になると運転しなくなる人の割合が高まります。これは、今は困っていないが、あと１０年経つと車の運転がままならなくなってきて、途端に困る方が増えることを示唆しています。





ほかには、「この地域にずっと住み続けたいと思いますか」というストレートな質問をしました。結果は、地区全体では半数以上の人が住み続けたいと言っていますが、年代ごとに集計をすると４０代以下は地区平均以下の数値です。そして、２０代に関しては住み続けたいと思う人が地区平均の半分以下です。これではどんどん若い人が流出していってしまうということです。どうしてこういう表現をしているかというと、全体の集計だけでいくと人数が多い層の意見だけが色濃く反映されるからです。年代ごとに集計をしないと、せっかく全住民でやるアンケートの意味がありません。アンケート分析はここまでやるといろいろなことが見えてきます。



さらに、「自分の子どもに住み続けてほしいと思うか」という質問もしました。地域全体では４割以上の方が住み続けてほしいと言っています。しかし、高齢の方はそう言っていますが、若い方はそうではありませんでした。ここで気になるのが、子育て真っ盛りの親世代が、子どもに住み続けてほしいと思う割合が地区平均より低かったことです。これはどういうことが起きてくるかというと、もうひとつ前に見せた結果と合わせてみると、親世代の住み続けてほしいという期待が低ければ、子どもたち自身が住み続けたいと思わないのは当たり前ではないか、単純に子どもたちだけの問題ではないということです。

皆さんよく「うちの地域は〇〇がダメだ、△△もダメだ」というようなことを言っていませんか。それを聞かされている子どもたちは、当然外に出て行ってもいいと思ってしまいませんか。そういうことで、みんな都会に家を建てて、地域から離れてしまいます。地域の話し合いで、お母さんたちがグループで「この地域はこれが不便、あれがない」と話しているので、子どもたちに地域に残ってほしいのにそういう話ばかりしていてはだめなのでは、と言ったことがあります。

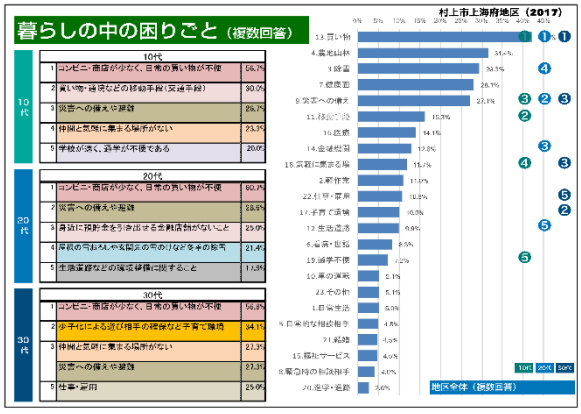
地域への愛着というのは、地域のいいところを大人が言い続けられるかどうかが大事です。ある日突然「住み続けろ」と言われても、ずっとそうでない話を聞かされ続けていた子どもは、より便利な方へ移ってしまうのがある意味当然です。そういうことをアンケート結果が裏付けているということを浮かび上がらせました。

ここで、うちの地域はヤバいと思われる方もいると思いますが、取組を変えると違う結果が出るということもご紹介します。魚沼産コシヒカリで有名な魚沼市は山奥にあります。そこのある地域でアンケートをとったときに、４０代男性と１０代男性だけが飛び抜けて「この地域に住み続けたい」と答えた割合が多かったのです。また、「この地域を良い地域だと

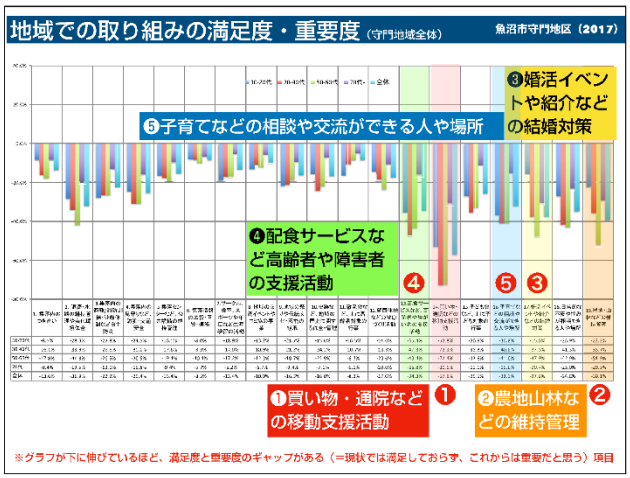
思うか」という質問にも「そう思う」と答えた１０代男性が飛び抜けて多く、全世代の中で１位でした。それはなぜなのか、地元の方に理由を聞いてみました。

この地域の学校は小規模校ですが、親子での地域学習を徹底的にやったそうです。だから子どもたちは地域が大好きになって、さらに親も巻き込んで学習活動を行った結果、４０代のお父さんたちにもその意識が伝搬して、こういうアンケート結果になりました。ただ、地域学習が自然学習だったので女子に受けが悪かったらしく、女性の意識が高まらなかったことは反省だそうです。この結果は偶然ではなく、地域学習をやっていない世代は、住み続けたいと誰も回答していません。そういう結果がはっきり出ています。教育などいろいろな取組は結果が見えにくいと言われていますが、きちんと結果が出ます。学校の先生もこの取組は間違っていなかったと言われていたそうで、そういう確認にもアンケートは使えます。

また、地区の困りごとを聞いていくと、必ずしも地区全体のランキングと世代別のランキングは一致していません。若い世代には若い世代の困りごとがあります。１０代は、仲間と気軽に集まる場所が少ないということが上位に入っています。世代でばらつきがあるということです。ただし、年代が高くなると地域全体のランキングと一致していきます。これが人数の多い人たちの意向が反映されるということです。



そして、いろいろなテーマに対して、現状の取組に満足しているかということと、今後の重要度について５段階評価で尋ねました。これについてどう見るかというと、今後のことを考えると、重要だけど現状では満足していないところに力を入れるべきではないか、ということです。



別の見方をすると、左にあるグラフの棒が下に伸びていればいるほど重要度と満足度のギャップが大きく、重要度と満足度が一致していないというグラフです。第一位は買い物、移動支援と出ているのですが、移動の話は誰が困っているかというと必ずしも高齢者ではありません。３０～６０代の方が最も必要としています。これは、３０～６０代の方が、高齢者や子どもの送迎が大変だから何とかしてくれ、と思っているという結果です。子どもたちがいなくなったら誰がやってくれるのか、今のうちに地域で仕組みを作らないとまずいのではないかという意思表示です。年代別に見ていくとそういうことが見えてきます。農地山林の維持管理についても、相続をする段階の人が危機感

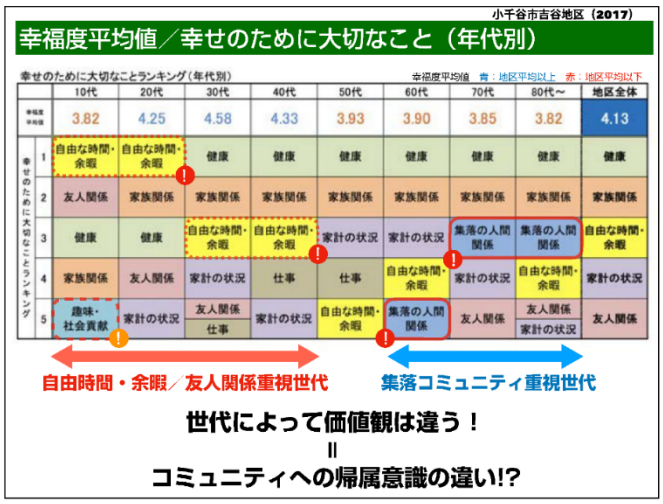
を持っていたり、婚活については若い世代は必要だと言っていない、大きなお世話だと言っていたりするわけです。

また、地域に特定の課題があると、それに合わせてアンケートを分析することもあります。ある地域で、児童数が少なくて閉校になる小学校があるということでした。今まで地区運動会を学校の運動会と同時に開催しており、運動会を通じて地域と子どもの親睦を図る取組をやってきました。さて、学校が閉校になったら運動会はどうしますか。年配の方にとっては若い人と顔を合わせる貴重な機会です。小規模校の運動会は、子どもにとってとてもハードです。種目が続いて休む暇がない割に、ギャラリーがとても多いです。あまりにも子どもたちが大変なので、あるとき校長先生が、地区の運動会と合同でしませんか、と話を持ちかけました。そうすれば地域にとっては運動会の人集めが容易になるし、学校にとっても子どもたちが休憩を取れるし、みんながハッピーな形の運動会になっていました。そういう経過の中で、学校が閉校になるがどうしようという議論になりました。この地域の最多年齢層は７０代で、役員のほぼ全てが７０代の方でした。さらに、これから人口減少と少子高齢化が著しく進む地域です。３０代の人数は７０代の４分の１以下で、やじろべえ型の年齢構成です。運動会をどうするのかという議論になれば、多数派に押し切られるのが目に見えています。そこで、運動会の満足度と重要度について地区全体で集計したものと世代別に集計したものをグラフにしてお見せしました。

７０代の方は、運動会に満足していて続けるべきだと答えていました。それ以下の世代は、もうやめようという意見で、重要度も満足度も低かったです。そういう結果を踏まえて議論してもらいました。このときばかりは７０代の方たちも静まり返りました。でも、やめようという話にはならないのが難しいところです。１０代の方たちは運動会を続けてほしいと答えていたからです。これを受けて大人たちはどうしますか、となりました。議論は喧々諤々と続いているそうで、まだ結論は出ていません。この地区ではアンケートの回収率が８割を超えているので、アンケート結果が重く受け止められて、議論の題材にされています。ここまで丁寧に住民アンケートをやっていくと、いろいろなことが見えてきます。

例えば、最近、若い人が地域の活動に出てこないということがよく言われますが、これを「価値観の変化」や「ライフスタイルの変化」という便利な言葉で片付けてはいけない、と考えています。具体的に何がどう変わって出てきてもらえなくなっているのかきちんと把握しましょう。

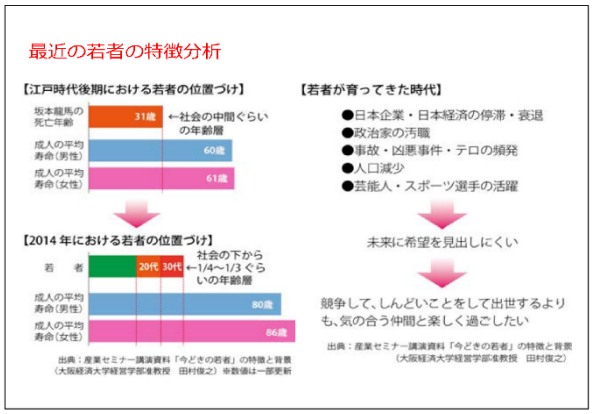
ある地区のアンケートで「あなたは幸せですか」という質問をして、１０点満点で答えてもらいました。結果は、若い人たちほど高い点数でした。お年を召されるほど幸福度が低くて、若い人は現状である程度満足しています。アンケートでは、幸せのために大切なことも聞きました。全体の結果では、上位に「健康」と「家族関係」がありましたが、その後に何が続いているかが実は大事です。若い人は「自由時間」や「余暇」、「友人関係」を強く重視しています。それに比べて、年配の人は「集落の人間関係」に重きを置いています。幸せの

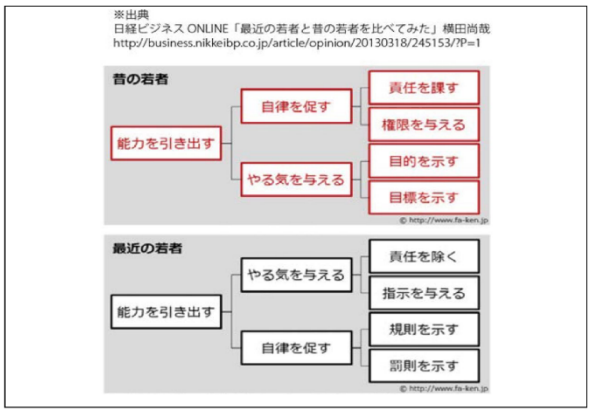


ために大切なことについての価値観が違うわけです。地区全体を見ると、「健康」と「家族関係」は飛びぬけていて、それぞれの年代でランクインしています。７０代以上は「集落の人間関係」を重視する世代です。５０代では「家計」や「仕事」が重視されています。３０～４０代では「自由な時間・余暇」が重視されるようになって、１０～２０代ではそれがずば抜けています。また、「趣味・社会貢献」をどちらと採るかという問題はありますが、１０代ではこれを重視していることも他の世代とは違う結果が出ています。

ここから分かったことは、若い層は自由や余暇、友人を重視していて、年配の方は集落コミュニティを重視しているということです。だから、若い人のコミュニティへの帰属意識に違いがあるのは当然です。また、育ってきた社会環境を踏まえた現代の若い人の特徴を、大学の先生の研究結果を借りて説明します。古い話をすると、江戸時代、坂本龍馬の頃は平均寿命が６０歳くらいでした。坂本龍馬が亡くなったのは３１歳で、社会の中間層の頃でした。３１歳と言えば、現代ではまだ社会の中で半分より下に位置しているわけです。寿命が延びている中で、いつまでたっても若い人は下の年齢層になってしまいます。また、育ってきた背景を考えると、失われた２０年と言われる時代があったり、平成も終わるということで、いろいろなことを言われていますが、未来に希望を見出しにくい時代です。そうすると、競争して出世するよりも気の合う仲間と楽しく過ごしたい、と強く思うそうです。

これはまた別の方が言っていることですが、昔の若者と今の若者の違いについて、昔は若者の能力を引き出すためには、自律を促してやる気を与えたそうです。自律を促すためには、責任を課して、権限を与えました。やる気を与えるためには、目的と目標を示していました。例えば、地域の青年会などがそれにあたる役割で、このやり方で今までやってきたわけです。では、今ではどうなのかというと、大学生が企業に就職した後まで追跡調査した結果ですが、





今の若者の能力を引き出すためには、やる気を与えて自律を促すそうです。やる気を与えるためには、責任を除いて指示を与えます。自律を促すためには、規則を示して罰則を示すそうです。これがいいか悪いかではなく、現実がそうなのです。昔はこうしていたというのが現在では全く通用しません。相手が変わっているので方法を変えなくてはいけないのです。

若い人にやる気を与えるということで、ある集落では、毎年夏祭りを民家すら何もない山のてっぺんでしているそうです。しかし、夏なので飲み物も飲みたいし、食べ物も食べたいわけです。そこに、集落の若手で出店を担当させます。安いスーパーで飲み物や食べ物を買ってきて、定価で売ったらいいわけです。そこで上がった利益を活動費にさせるという取組です。儲ければ儲けるほど活動費が増える、自由に使えるということでした。

ほかにも、動画におしゃべりカフェが出ていました。あれは、地元工務店のモデルハウスを使わせてもらっています。そこで若い人たち向けのサロンをしています。毎週水曜日の午後３時～８時までで、アルコールは出しませんが、飲み物やお菓子をご自由に、という形でやっています。会社帰りの人や子連れのお母さんたちが多い時で１日に５０人、青年会議所や地域の青年部などそういう活動に全く関わっていない人たちが利用しています。こういう人たちの発掘は今までずっとできていませんでした。なぜ、若い人たちが集まるようになったのかというと、いつ来てもいいし、いつ帰ってもいいというルールにしたからです。何かをやらされるとか、目的を示すというやり方を外して、自由な時間に来てぱっと帰ってもよし、としました。なおかつ、指示を与えます。基本的にはセルフサービスだから自分で取って食器は洗って戻して、という指示を出して、あとは思い思いに好きなようにしています。若い人たちは、結構地域のことを考えていて、何も考えていないわけではありません。ここは単なるおしゃべり場ではなく、熱くいろいろな話が出ます。そういう話を拾って、若い人たちでやってみないかということで、チャレンジプロジェクトを自ら企画して実施するということにつなげています。

この世代はいきなり上の世代とつながりたいとは思っていません。同世代とのつながりがあって始めて、上の世代とつながろうと考えます。いきなり上の世代とだけつながるのは稀です。今の若い人たちには横のつながりがないので、横のつながりを作ってあげないと地域の担い手になってもらえません。若い人たちが仲良くなると、いっしょに地域のイベントに参加するようになります。今まで出てこなかったのに、お客さんの立場で参加するようになり、そこからだんだん参画する、やる側にまわるようになります。若い人たちがそういうステップを踏める、若い人が集う仕組みを考えないといけません。

新たな担い手をどう集めるか、若い人をどうやって集めるかについて、具体例をもう少しお話しします。地域づくり活動が先に進んでいるところに共通して起きているのが、人の固定化、新たな人が出てこないということです。それにはいくつか原因があって、その解決策

の一つが一世帯一票制から一人一票制へという考え方です。今までの自治会は世帯単位での加入だったと思います。数字が並んでいる資料（別紙１）がありますので見方を紹介します。真ん中に世帯当たりの人数、一世帯当たり何人住んでいるかということが載っています。今、名張市全体では一世帯当たりの人数は２．５６人、全国平均は２．３３人なので全国平均よりは高いです。日本の基本形は４人世帯（父、母、子ども２人）で、それに基づいて社会の仕組みが作られてきましたが、実際は一人世帯が一番多くて、全体のおよそ４分の１が一人世帯です。

※各地域版については別紙１を参照ください。

名張市における高齢者の推移・予測

名張市全体　各年の国勢調査データ　独自推計値

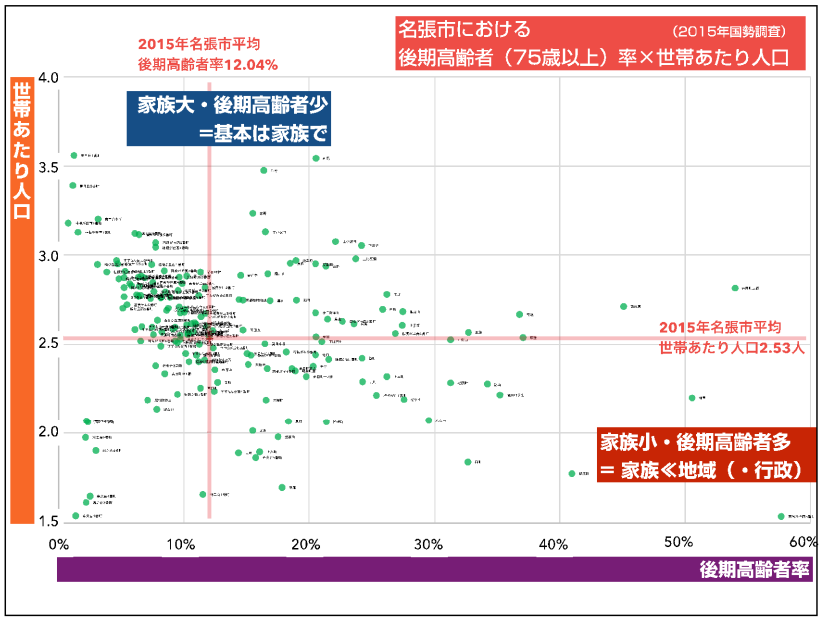
	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年	2030年
高齢者数	12,440	14,893	18,066	22,273	24,622	24,993	24,239
高齢者率	14.9%	18.1%	22.6%	28.3%	32.4%	34.6%	35.6%
後期高齢者数	4,882	6,578	7,985	9,574	11,429	13,860	14,912
率（同）	5.9%	8.0%	10.0%	12.2%	15.1%	19.2%	21.9%
65-74歳	7,558	8,315	12,699	12,699	13,193	11,133	9,327
率（同）	9.1%	10.1%	15.9%	16.1%	17.4%	15.4%	13.7%
85歳以上	1,180	1,555	2,078	2,860	3,315	3,731	4,508
率（同）	1.4%	1.9%	2.6%	3.6%	4.4%	5.2%	6.6%
一般世帯数	26,683	28,264	29,445	30,540	30,381	29,554	28,203
世帯当たり人数	3.10	2.88	2.69	2.56	2.48	2.42	2.39
65歳以上単身	1,156	1,619	2,146	2,935	3,186	3,300	3,242
65歳以上夫婦	2,353	2,193	3,101	5,021	4,242	4,310	4,211
高齢者のみ世帯	3,509	3,812	5,247	7,956	7,428	7,610	7,453
率（同）	13.2%	13.5%	17.8%	26.1%	24.4%	25.7%	26.4%

今までの自治会の仕組みは、一世帯当たりの人数が多いことを前提として、世帯単位にしていましたが、世帯数が減っているということは、共同作業の時に「各世帯から出てね」という言い方をしていると、そもそも世帯の余裕人数がないから出てこない、人が集まらないという負の循環になってしまいます。この世帯単位の考えかたを変えないと、今後も人が出てもらえないという状況に陥ります。地域ごとに世帯数の推移を示していますのでぜひご覧いただきたいと思います。

もう一つ、各地区によって状況は違うので、該当するところは気にしていただけたらと思います。前段で説明した地域の役員の担い手になっていただいている６５～７４歳の方々の人数が、どの時点から急激に減ってくるかを各地区で注意して見ていただきたいです。役員のなり手の確保は今でも苦労しているのに、さらに人数が減ればどうなるか、少ない人数で仕事の量が変わらないのならば、負担感が増すのは当たり前の話です。

この数字が示唆していることがもう一つあります。例えば、名張地区の６５歳以上の単身世帯数は２０１５年は５１２です。５年ごとの変化を見てみると、２０２０年は４１８、２０２５年は３７９、２０３０年は３３２となっています。これが何を意味しているかというと、空き家が増えるということ、空き家予備軍の数です。世帯が減るということは家主がいなくなることにつながります。この数は注意しないといけなくて、空き家になってからの対応はものすごく大変です。空き家は個人の財産です。地域が困るのは、それが手入れされないことで、庭木が伸び放題になって隣に覆いかぶさってきたりしても、空き家は個人財産なので勝手に切ってしまうと訴えられると負けるとか、空き家への放火の懸念であるとか防犯上や治安上の問題が出てきたり、建物が朽ちてきたときに道路に瓦が落ちてくるとかそういう問題があるわけです。私の地域でも、集会所の隣が空き家になって、そこの瓦が集会所の駐車場に落ちてきたことがありました。何とか持ち主の方を探して、建物を壊すようにお話ししましたが、ここまで１年がかりで費用も集落負担でやりました。空き家になった後では大変です。空き家になる前の対策が重要です。

６５～７４歳の地域の担い手の人数と、６５歳以上の単身世帯の推移を各地区で見ていくと、これらの数字が減り始めるところが多くあります。今までとは同じようにいかないことを示している数字です。このことについても、各地域でご協議いただきたいと思います。



こういう数字を見ていく中で、とにかく必要なのは住民同士の対話の場です。これがあるといろいろな話が出てきます。今までこうしていたけれどこうしましょうという話も出てくるし、新しい担い手の発掘としてはこういうケースもあります。

宮城県白石市のある地区で昨年の夏にアンケートを行いましたが、住民報告会に若者が出てきませんでした。しかし、そういう人たちの声を聞くべきだということで、昨年の冬に１０～２０代だけを集めたアンケート報告会と意見交換会をやりました。その中で見えてきたことがあります。若い人たちは、中学校までは学校が同じで横のつながりがありますが、それがどこで途絶えるかというと、まずは高校進学です。報告会の出席については、親御さんたちに「お宅のお子さんにぜひ来てください」と拝み倒してお願いしました。学校や習い事がないタイミングを親御さんたちに聞いて、日曜日の午後６時に開催しました。高校生たちがここで何をしていたかというと、久しぶりに顔を合わせるので近況報告をし合って、終わった後には記念撮影までしていました。結局、お互いにどうしているかよく分からないんです。こういう場があれば来るのかと彼らに尋ねると、誰が来るのか分かっていたら来る、と言います。だから、誰が来ているのかという情報を教えてあげることが大事です。そうやっていると仲間内でわいわいやって、その後も集まっています。その後どうなったかというと、地域の行事に自ら手伝いに来るようになりました。地域の人が、たまたま会ったときに「みんなで手伝いに来いよ」と声をかけたら、本当に誘い合って突然来たそうです。

「楽しいこと」をとよく言われますが、「楽しみながら」ということが大事です。基本的には、「楽しいこと」と「楽しみながら」は違います。単なるイベントや行事をやるのでは

なく、困っていることであっても、楽しみながら解決していく知恵と工夫がこれからは求められています。課題から考えるのではなく、結果として解決されるということが大事で、最近お話ししているのは「掛け算」です。いろいろな要素を組み合わせて考えるということです。これだけ人が減ってくると、足し算で新たなものを加えていこうとすると、人手が足りない中でどんどん忙しくなって大変になります。新たにやらないといけないことはたくさんあります。そうした中で、掛け算、何かのついでにいっしょにやってしまうということで、私の地域で昨年の秋に始まりました。その取組がＮＨＫのニュースで放送されたのでご覧ください。始まりのきっかけは住民アンケートです。

～ＮＨＫニュース映像～

今日、村上市で防災について学びながら楽しもうという運動会が開かれました。

これは、村上市の神納東地域まちづくり協議会が企画したもので、運動会の７つの種目のうち、２種目に防災の要素が取り入れられました。

このうち「あんぜん・あんしん搬送リレー」は毛布と棒で担架を作って案山子を運ぶ速さを競う種目です。参加した人たちは担架の作り方を教わった後、二人一組で急いで担架をつくっては、走ってゴールを目指し、次の組にバトンタッチしていました。

また、防災借り物競争は非常持ち出し袋を背負って、防災グッズを集めていくもので、参加したメンバーはカードの指示に従って懐中電灯やラジオ、非常食などを一つずつ袋に入れていきました。

（児童）

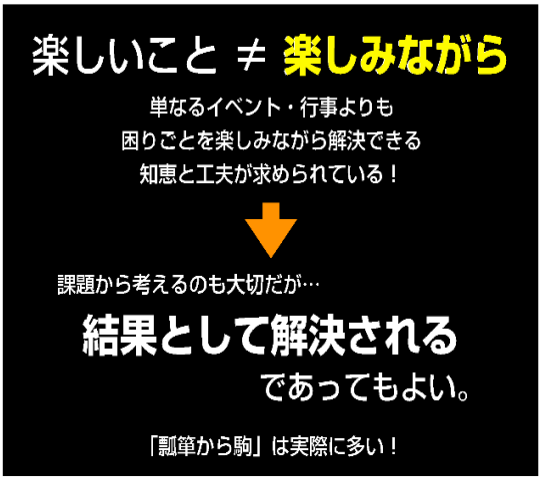
「学校とかではこういう勉強はあまりしないので、今日ここで勉強できてよかった」

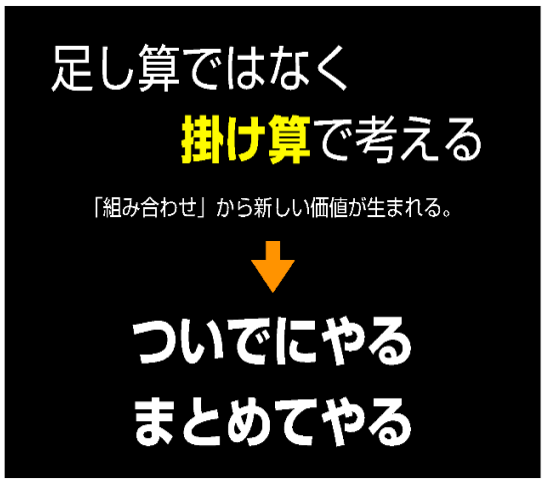
（地域住民）

「楽しく担架の作り方が分かったのでためになったと思います」

（協議会）

「最近、大きな災害もありますので、楽しみながら防災のことを学んでいけたらいいと思います」





ここでも、キーワードは「楽しみながら」なんです。住民アンケートの結果で、これからは防災が大事だという声が上位にあがって、何とかしなくちゃいけないということで考え出したのがこれです。新たな手間をかけて防災訓練をやるというよりは、楽しみながら、今あるものに追加していくということです。これは、アンケートの結果を生かした無理のない範囲での取組です。

それ以外にも、困りごとから何かを取り組もうとするとすごく大変です。困りごとはなかなか人には言いません。だから最近は「困りごと」という言葉は使わないようにしています。困りごとは深刻になった状態でしか表に出てきません。そうなる前に手を打つことが大事です。要は、負担の軽減、少しのお手伝いがあれば暮らしが快適になる、を入口にした方がいいです。だから「最近しんどくなってきたことは何？」と聞くようにしています。しんどいこと、これがだんだん派生して困りごとになってきます。

例えば、年配の方々にとって日常生活で何が大変かというと、壁掛け時計の電池の取替えは困りごとというには微妙ですが、ちょっとしんどいことです。雨樋の手入れも、落ち葉が詰まると雨水が漏れてしまうので、登って落ち葉を取らないといきませんが、これも困りごとではないがしんどいです。これが入口です。困りごとをいきなり解決するのはハードルが高くなりすぎるので、しんどくなってきたことをお互いにちょっとお手伝いしません？という形でやっている地域があります。大分県日田市で「チョイてご」という住民同士でする本当にちょっとしたお手伝いをしています。事前に申し込みを受け付けて、日にちを決め、午前と午後に２時間ずつ、お互いに助け合いをしています。ちょっとしたことから始めていくということが大事です。

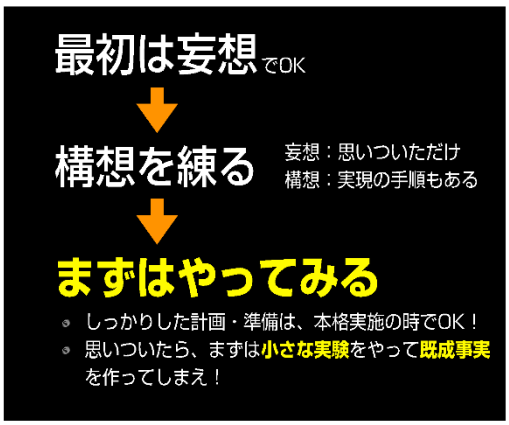
こういう取組のヒントは、会議の場では残念ながら出てきません。例えば、この場でいきなりマイクを突きつけても本音は出ません。何気ない会話やつぶやきの中にヒントがあります。具体的な種を探そうと思ったら、世間話が重要な仕事だと認識してください。地域の中でおしゃべりができる場をつくることがニーズ調査になるわけです。会議ではなくて、色々な方が気軽に出入りができるおしゃべりの場から本音が出てくるわけです。

おしゃべりからどんなことが起きてくるかというと、島根県雲南市で実際にあった話を紹介します。スーパーがなくなって、高齢者が買い物に困っているので住民組織が週１回お店を開けている地域です。そこで住民交流のためのサロンもやっていました。あるときサロンで、一人のおばあちゃんが「最近、包丁が切れなくなってきてね。食事をつくるのが億劫になってきた」とぼそっとつぶやきました。普通は「大変だね」と共感するだけで終わってしまいそうなところですが、この地域の人たちがすごいのは、これを聞き逃さなかったことです。『お年寄りが自分で食事を作らなくなったら、食生活が荒れて体調を崩すかもしれない、その結果介護度が高まる可能性があるかもしれない、包丁研ぎは介護予防だ』と考えたわけです。これは妄想以外の何物でもありません。しかし、実際にやってみたら集落中から包丁が集まってきたそうです。最初は、１時間だけで一人で研ぐ予定でしたが、１００本も

集まったので持ち帰って研ぐのに３か月かかりました。次は、人数も増やして機械も用意して万全の体制で臨みました。そこで、包丁だけだったら暇になるかもしれない、という考えが起きて、鎌や枝切りばさみも対象にしたら、前回をはるかに上回る数の集落中の刃物という刃物が集まってきたそうです。これは、全てはおばあちゃんのつぶやきから始まっているんです。

こういうつぶやき、おしゃべりを聞き逃さなかったあとは、妄想を膨らませてください。これはこうなのではないかという妄想をかきたててください。そして、一人で悶々と考えるのではなく、いろいろな場でお互いにたくさん話し合ってください。１００ある妄想の中で２つか３つくらいは構想になるものがあります。妄想と構想の違いは、妄想は単なる思いつきですが、構想になると具体的にあの場所であの人だったらできそうだな、と実現の手順まで見えてきます。最初から構想は見えてきません。ＣＭや広告のキャッチコピーは１つ決まるまでに４００～５００ほど候補があると言われています。とにかく妄想でいいからたくさん考えてください。

そして、よく計画してから実行だと言われますが、妄想から構想が出てきたらまずやるんです。思いついたら即行動です。その時のポイントは、小さく実験することです。実験だから失敗がつきもので、失敗したらいけないと思うと結局動きません。小さくできる範囲でいいから、失敗しても大きな痛手にならない程度でやってみることです。そして、そういう実験を許してあげることが大事です。うまくいったら本格的に実施することを考えてください。そのときにしっかりと計画を立てて、位置づけをして、体制をつくったらいいわけです。先に小さくやるのがポイントです。この部分をこれから地域の中で考えていただければと思います。



ここからは、グループで感想を話し合ってください。そのあとで質問があれば受け付けます。

【質疑応答】
≪質問≫
役員の担い手の確保に困っています。今後は人口も少なくなっていきますが、今までとは違うやり方でうまくやっている地域があれば、その方法を教えていただけますか。
≪助言≫
自治会単位だけではなく、行政とも協力し合いながら負担を減らすしかないです。減らすといっても、そもそも役がどれくらいあるか調べていますか。団体ごとに組織があって、会議があって行事があって、会計があるということを、地区単位でまとめられることはありませんか、ということです。
例えば、大分県の旧上津江村、人口７７０人の山間の村には４つの自治会の下に２２の班がありました。その中に自治会関係の役が何人分あったか調べました。そうしたら、役は９７人分ありました。人口の約１３％が役を担うという計算です。それ以外にも交通安全、農業関係、民生委員など膨大な数の役があって、それぞれの役割ごとにイベントや行事、会議、会計などをやっていました。これを見た地域の皆さんは愕然として、やっぱりまとめようということになりました。個別にやっていることの中で、住民自治組織でまとめられることはありませんか。すぐにできることではないですが、これが不可欠です。
そして、意外に多いのが行政からの充て職の数です。これもいっしょに考えていくのが絶対的に不可欠です。これに手を出さない限り、回らなくなるのは明らかです。
まず、役がどれくらいあって、今の役員にどれくらい負担を掛けているのかについて見える化をしてください。何月にどういう組織が何をしていて、会議が何回あるかということを一覧表にします。あるところでは行事の棚卸しをして、統廃合しました。自分が役員をやっているときに何かを止めるという決断はしにくいです。ハードルが高いです。しかし、これとこれをいっしょにやっちゃおう、ということにすると、負担は半分近くになります。これを繰り返していくわけです。続けるもの、止めるもの、いろいろなものを一つずつ決断して棚卸しを実施したところもあります。
例えば、防災マップを作られているところも多いと思いますが、山形県新庄市のある地域では、防災マップの隣に、ご長寿の方を東西に分けて番付にした長寿者番付（どこの町に何歳の方がいらっしゃるというもの）を載せています。これには、氏名、生年月日、町名が載っています。なぜこれを２つ並べているかというと、２つ掛け合わせると要支援者リストになるからです。今あるものを組み合わせる、掛け合わせるというのはこういうことです。全く接点がなかったものをいっしょにしよう、今後求められるのはこういう知恵と工夫です。
人が限られていく中で、２つあったものを掛け合わせる、今あるものをいっしょにやってしまう、という形で負担感を減らしていくのが特に大事になってきます。

≪質問≫

丘陵地の地域で、法面があちこちにあって草刈りに困っています。住民も高齢化してきたので作業が危険になってきたのですが、何か良い対策はないでしょうか。

≪助言≫

法面対策は、あまりうまくやっているところがないのが実情です。法面の危険度、状態にもよりますが、地域の中で法面が問題だ、と言われますが、もう少し問題の本質を掘り下げるほうがいいと思います。

高低差のある地域では、まず買い物が問題になってきます。重たいものを持って、坂道を上り下りして買い物ができるかということです。平面的な距離では、お店が近隣にあることになっていても、どれくらいの高低差を上り下りしないと買い物に行けないかというと、階段５階分にも相当することがあります。高低差のある住宅団地では、車が運転できなくなったときにはお店に行けなくなるということです。法面に対する取組も大事ですが、今は困っていなくても、今後困りそうなことを先に見つけて備えをしておくことも必要です。

ある地域では、コミュニティバスも走っていて、買い物に行く仕組み自体は整っていました。高齢者は、週に３日、バスに乗ってスーパーに行って買い物をしていますが、鮮度が落ちるので、肉や魚を買って来られないそうです。また、かさばる物も持ってこられないそうです。こういう困りごとを地区の中で特定しておいてもらいたいです。その地区では、地元の若いお母さんたちが集会所で頒布会を開いているそうです。買うのに大変なものを予め聞いておいて、自分の買い物のついでに余分に買っておいて、頒布会でお譲りするという形です。そしてここは単なるお店ではなく、茶飲み話をする場にもなっています。

法面があるということは相当高低差が激しいところですよね。お店は見えるけど、帰り道が大変だというところは、こういうことが起こってきます。自分たちができるようなことを地域の中で掘り下げてもらいたいと思います。「何が困っていますか」と尋ねるのではなく、「これが大変なんだよね」というつぶやきを集めてほしいです。法面があることで、何が問題なのか掘り下げておくということです。法面のハード的な部分は行政と相談することが大事ですが、それによってどういう災害が想定されるのか、その下に住んでいる方の避難が難しいのか、何か物理的被害の恐れがあるのか、それを検討してください。

とにかく、これから新たな人を巻き込もうとするときには、小さな実験から始める、いろいろな形でまずは始めてみる、とりあえずやってみる、ということが大事です。初めは妄想でも構いません。おしゃべりの場を設けるということを各地域でやってもらえたらと思います。

また、研修中にお示しした「名張市各集落の人口構成分布」については、市にデータをお渡ししておきます。データでも文字が小さくて読みづらいので、状況をよく把握するために、模造紙に拡大して印刷して、ご自身の地域にシールを貼ってみてください。

本日はありがとうございました。

※議事録中に挿入した資料は、別に添付しております当日の資料から一部抜粋しております。